精神史と類型学（1）

佐　野　晴　夫

I

ドイツ語圏に帰属しない文学研究者が、ドイツ文学を学びはじめるとき、早速、しかも思いがけず、ドイツ語のほかは表現しがたい幾つもの術語に出会う。その代表的なものがLiteraturwissenschaftであり、Geistesgeshichteであろう。前者の意義を理解した上で、日本では「文芸学」と翻訳しているが、フランス語でScience de Littératureと置き換えるとき、ゲルマニストの使用する観念的で普遍的なニュアンスが拡張してぼけ、それに代って、社会性と歴史性の意識から具象的な要素を帯びてしまう。ましてや、後者について、何の予備知識も備えないで、日本語で「精神の歴史」とか、英語で“the spiritual history”とか訳すとき、あまりにも無反省となり、19世紀から20世紀初頭のドイツにおける思想と研究方法より乖離してしまう。しかし、そこで、例えば、「ドイツの」といった付加語を加える場合、さらに一層一般化された意味で、特殊な歴史叙述を意味しかねない危険を孕む。もし、どうしても規定詞が必要であるならば、せいぜい「ディルタイと彼の学派の」としか記述できない。そして、もっと煩瑣なことは、この概念規定の厄介で曖昧な「精神史」が、上位概念としての「文芸学」へ包含され、しかも文芸学の成立の初期に、重なるように、精神史の気運が生起していることである。

アウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲル（1767-1845）が1801年より1804年にかけてベルリンで行なった講義「美文学と美術に関して」から、ウィルヘルム・シェーラー（1841-1886）の本来的な意味での最初の文芸学の洗礼を受けた「ドイツ文学史」（1883）に至るまで約80年経過する。この間に、全体を取り扱った文学史は、ドイツで、凡そ50種ほど見付かる。ゲオルク・ゴットフリート・ゲルヴィヌス（1805-1871）は一般的歴史発展と文学とを関連づけて「ドイツ人の国民文学史」（1835-1842）を書き、その中で、ヘーゲルやゲーテの死とともに、また1830年の政治革命でもって、本来的な国民文学の終焉が見られ、それは「ほぼ全盛期

を前にした夭折」だと悲観している[1]。またヘルマン・ヘットナー（1821-1882）も「18世紀の文学史」（1856-1870）で社会的・政治的観点より文学を対象として、ゲルヴィヌスより学問的に緻密となり、ゲーテの死までの18世紀文学を啓蒙主義運動の本質的な側面として説明しようとした。この間、K.A.コーベルシュタイン（1797-1870）A.F.C.ヴィルマァル（1800-1868）Th.W.ダンツェル（1818-1850）R.ハイム（1821-1901）等は、文学の歴史学の設立を試みた。しかし、そこでは、彼等の多くは、文学の諸ジャンルで表現された作品を文献学的立場から収集し、漫然と列記する域を越えなかった。しかし、文芸学の概念的な萌芽は、まずテオドール・ムント（1806-1861）の「現代文学史」（1842）の中で発見できる。文芸学という用語がドイツの文学研究者の間で使用されているうちに、用語の外延を拡張したけれども、低次元の文学批評を克服した文学の科学へまで一気に意欲されたわけでない。

古来、慣例となっていた文学史の意識を脱却して、美的な価値をもつ文学を前提として、文学の諸領域を理論的・体系的に研究することを最初に実行したのはウィルヘルム・シェーラーである。彼が文学の歴史的研究を企てるとき、芸術としての文学を考察対象として文芸史の確立を志向し、史的所産である作品の素材のレヴェルに満足することなく、統一的な定点から、文芸史の叙述を秩序づけて説明しようとした。ここで、文芸学は、文学的な認識を深める学問となり、その科学的究明の要求は、シェーラー学派の実証主義に結実し、テキスト批判と詩人の伝記に対する科学的研究に重点をおき、また社会学的方法をとり入れて、時代が詩人に及ぼした影響を明らかにし、時代間の文芸思潮の交代の盛衰を明確にしながら、そこに支配する潜勢的な法則性をも開示しようとする傾向があらわれ、部分的ながら実現した。シェーラーやエーリッヒ・シュミット（1853-1913）をはじめとする実証主義者達の研究方法を吟味するとき、合理的に分析ののち、帰納法を使い、所与としての客体を志向し、その思考は線型と呼ぶべき連鎖の列を想起させ、しかも対象に対して伝記的に立ち帰った関係より記述説明しようとしている。しかし、そこに見出すのは、文学で反映される存在者であり、現実を前提としたところの拘束をうけた歴史的事実性であり、従って、経験を所与として主張し、かつ必然性と因果律に決定づけられたものを詩人の一部分として固有性を主張する姿勢である。

このように、19世紀後半より発展してきた実証的な方法論が文芸研究の新しい局面を拓いたことは功績ではある。けれども、その方法論は自然科学の先占的影響のもとにあり、それだけに人間の科学として、文学を完全なるものとして考察

し、個別の作品は統一的精神の史的記録として理解されるべきだと思念し、文学を精神の発展関連の中で位置づけようと試みる者にとっては、実証主義の人々と対極に立つこととなった。芸術の理解には文献学的・史的な因果律の思惟ばかりでは、不十分であり、ここで、初めて、ヴィルヘルム・ディルタイ（1833-1911）が「生の哲学」の立場から、詩人研究・解釈・時代説明といったことに手を染めた。彼は、文学の現出形式がますます考慮されなくなり、内容が前面へあらわれくる事実に気付き、また生と文学とが概念的に把握しようとする慣習から離れてしまい、その代償として文学を直観的に観て、感情移入するが、「同じ程度で」追体験しようとすることを認めた。ここにおいて、初めて、彼は、文学が体験の表現として了解されるという立場をとり、文学と体験とを同一視することになった。

ディルタイは、自然科学と対立する精神科学に体系を与えて独自の領域を確立するために、著書「精神科学序論」（1883）を発表したかに思える「精神科学」は、ゲオルク・ヴィルヘルム・ヘーゲル（1770-1831）の絶対的精神とも関係なく、ジョン・スチュアート・ミル（1803-1876）が論理学で使用した名称と同様に、社会科学・道徳科学・歴史科学あるいは文化科学といった呼称をもってしても、その研究範囲を明示しえない学である。ところが、それにもまして、彼が「精神史（ガイステスゲシヒテ）」という名称を発案したとき、「精神（ガイスト）」は、形而上学で、理念上の上部構造を明示し、また「史（ゲシヒテ）」は、時間の中で生じる事実に依拠する形而下の下部構造に属するもので、理念的に、純粋に抽象化されたものでない。従って、「精神史」という術語は、理念的なものと材料的リアルなものを結合させた矛盾と異質の２つの魅力を湛える合成語である。だが、統一と完全をディルタイが標榜して強調するとき、歴史的な事実的要素は精神的客体化の過程で、その史料的要素が、「精神史」という名称に占めるかに思われる意義を失わざるをえない。なぜなら、歴史の動き・変化・展開は、精神の綜合にはさまたげとなるからである。同じ精神史の立場に立っても、ブルダッハ（1859-1936）やクルクホーン（1886-1957）は、他の者達にくらべ、遥かに歴史的思弁を企て、「精神史的」の代わりに「教育史的」という術語さえ使用する。だが、これとは対照的に、哲学的にはヘーゲルの流れを汲むルドルフ・ハイム（1821-1901）カルル・ローゼンクフランツ（1805-1879）クーノー・フィッシャー（1824-1907）カルル・フォスラー（1872-1949）ルドルフ・ウンガー（1876-1942）たちは、純粋の精神を目指して、「精神史的」方法にかわる「観念論的」方法を主張した。

ディルタイの発想する精神史の濫觴はヨーハン・ゴットフリート・ヘルダー（1744-1803）にあり、さらにフリードリッヒ・シュレーゲル（1722-1829）の「ア

テネーウム断片」121の類の理想について、また断片126の綜合文学について言及する中で、精神史的な輪郭が素描されている[2]。ディルタイ自身は、文芸学の歴史の中で、非歴史的で主観的な立脚点に立ち、観念論に思惟された精神史の嚮導者で、その実践した改革は印象深く偉大であるけれども、反歴史主義のフリードリッヒ・グンドルフ（1880-1931）やシュテファン・ゲオルゲ（1863-1933）一派を呼び起し、比較するまでもなく、歴史的頭脳の人であるという感じを与える。その意味では、実証主義から精神史への弁証法的な急転回の中で、ディルタイは、穏和で中間的ポジションをとっている、としか言えない。その態度は、かつての彼の歴史研究の姿勢から、また人間的心理のプロッセスを着実に追跡する習慣から来るものかもしれない。そして注目すべきことに、彼は文学における理念のみによる見解に偏し、時間を超越する観念的な見方にもっぱら賛意を示したことがないという重大な事実である。彼にとって、詩人と作品は時代的事柄であり、それが単純に超時代的なものへ関係させようと、自由気侭に取り扱ったことはない。彼が興味を寄せるのは、文学における生と体験を自分自身の生と体験へ関連づけて関与さすことである。ここに、存在と思惟、実在と理念という、本来、二律排反であるような論理性において、特殊な中間的な位置を見付け、歴史と人間の主観にほかならない理念の超時間性への依存と相対化との間で、矛盾そのものを容認することで存在せしめた。歴史的制約をうけた特殊な言語的造型を精神の一般的な超時間的法則と結びつける精神史的な文芸学の仕事の必然をディルタイは、明白に、自覚して、次のように語る。「それ故に、文学作品と国民文学の歴史の研究は、２点で、精神的生活一般の研究で制約を受けている。まず、私達は、つまり歴史的・社会的な影響全体の認識に依拠して、精神的生活を見出した……しかし、第２に、私達は、この創造をうみ出した精神的営為の本性は、精神生活一般の支配的法則によって働きかけることを知った。従って、美文学とその歴史の研究の基盤であらねばならない真の詩（ポエティーク）学は、この人間の本性の一般的研究と歴史的研究との結合から、その概念と主題とを獲得しなければならない」[3]。そして唯物的なものと観念的なものとが、客観へ傾いたものと主観へ集中したものとが、微妙なバランスを保っている。だが、これも「実証的な現実から歴史的・社会的現実の哲学的な見方を分けることは、形而上学の有害な遺物である」という定言に置きかえられ、精神史の基礎づけが、脅かしていた要因を排除したうえで、以後の精神史の発展を準備した。

このように、精神史的な教説は、確固たる概念の境界を取り払い、閉鎖的概念に頼ろうとしなかったのは、新カント派の影響のもとで、精神が、狭義に把握さ

れたまま、1900年を迎えた社会的・思想的状況と無関係ではないかもしれない。機械的な非目的論な進化論に対するネオ生命主義、実験心理学に対する了解心理学、非形而上学的な合理主義に対する生の形而上学といった図式を想定するならば、直観による認識方法のリハビリテーションが閉塞状態の精神に活力を注入することを可能し、また精神の精華である芸術と外的なものと感性的に知覚する生との関係を新しく深く理解するためには、これまでにない適確さで、垣根を取りはずした合目的的な見解を見付けなければならなかった。そこに要請されるのは、精神の綜合的な直覚である。そのためにも、精神科学は個別部門として、哲学・宗教・歴史・社会学・政治・法律・経済等を遊離さすことなく、関連の中へ編み込み、綜合して統一することが必要となる。少なくとも、ディルタイの考想した精神科学の一般化した形態は、1923年に、やっとエーリッヒ・ロータッカーとパウル・クルクホーンが協力して刊行した雑誌“Deutsche Vierteljahrschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte”で実現している。上位概念におかれた「文芸学と精神史」の研究雑誌では、理論的労作が多数を占めたけれども、精神が、歴史の経過において、さまざまの媒体を通じて現われることを例証するものも少なくなく、文学研究者ばかりでなく、哲学者・宗教家・歴史家・社会学者・文献学者等も寄稿し、精神の諸学の間の結びつきが読者に実感として受け入れられた。正しく、そこで問題とされたのは精神科学の綜合形式のあり方であった。

あらためて、ディルタイの生の概念に戻るならば、生が最高の根本概念である。精神は決して生をつくり出しはしない。精神は反省したり、造形したり、また生を了解するにすぎない。彼にとって、文学は生を了解する機関である。その了解は合理的な解明よりも、生の測りがたい不可知性にふさわしい理解なのである。そこに生ずる個別の行為を彼は「体験」と呼んだ。単なる認識に終らない了解の基礎となるのが、この体験と共に、「一切の心緒をこめて対象の中へ沈潜すること」と語る「感情移入（アインヒュールング）」である。ディルタイの思弁は、ここに至っては、芸術作品を合法則的な経過の中でとらえる啓蒙主義に対するプロテストかもしれない。人間の生は複雑で秘密に富んだ綜体であり、単純な同一形や反復の思考では捕捉しがたい。その具体的な特殊性や汲み尽くせぬ漸新性を備えた個人の生こそ固有価値を有するものと言えよう。

ここで、あらためて、実証主義のアンチテーゼとして現われたディルタイ学派の思考法を要約するならば、彼等は直覚的な綜合をめざして、主観的で個人的意識の説明に関心を寄せ、そのために、体験に基づく了解作業によって、作品内の

世界を離れて、読者との間に構造を示すような円環的思考を用いる。彼等の思考は演繹法に負うているが、創造的なものとして精神を把握して、文学の自律性を保証する自由を尊重し、結果において現われくる超時代的な理念より超越性を、究極的に、獲得する。

従って、ディルタイとその学派が、精神史特有の演繹的思考に立脚しながら、作者を研究対象とする場合、その精神構造から、創作時の体験を分析した上で、世界観的類型と類別へ接近する傾向が顕著となる。次に、彼等が特定の作品を研究対象へ選ぶ場合、芸術的価値を有する作品であっても、ジャンルをこえて、その本質との関連から、様式とか構造とか呼ばれる分類へ最大の関心とよろこびをあらわにする。このように、精神史家たちは、文学社会学であれ、心情史であれ、新しい伝記学であれ、作品史であれ、種族史であれ、様式史であれ、類型学にこだわり、図式化する。そこで、次には、果して、類型の図式が精神史的研究には不可避なものなのか、もし必然性があるとすれば、その因果性について、また、その意義と効力について、是非とも、確認する必要があろう。

【未完】

1991.4.10

註

(1) G.G.Gervius : Geschichte der poetischen Nationalliteratur der Deutschen. T1. 5, 2Aufl. Leipzig 1844. S.361.

(2) Kritische Friedrich Schlegel-Ausgabe. Xl. Paderborn 1958. S.121.

(3) Wilhelm Dilthey : Einleitung in die Geisteswissenchaft. In : Gesammelte Schtiften. Bd. l. 1922. S.88.

(4) ibid. S.109.